（要約版）

文化的嗜好品の比較研究－コミュニケーションツールとしてのイランのチャイと日本の酒についての一考察

奈良　玲子（和洋女子大学）

1. 研究目的

日本における「酒」、そしてイランにおける「チャイ」が、夫々の社会におき、どの様な形でコミュニケーションツールの一助となり人間関係を円滑に築く過程に貢献しているのかを分析する。夫々の文化的、社会的、そして宗教的な社会背景を加味し、強いて同じ嗜好飲料の比較を避け、日本の調査では「酒」、イランにおいては「チャイ」を対象とした。各々の飲料が①新しい関係性を築く際に有効なのか、②既存の人間関係をより親密なものへと移行させることに貢献するのか等を明らかにする。

日本の場合は、伝統文化の一環であるハレの日などに設けられる酒の場、或いは職場などにおける、所謂、飲み会などが、コロナ禍を介しどの様に変化し、飲酒と人付き合いについての個人の考え方に影響を及ぼしたのか、更に、今後、コミュニケーションツールとしての酒を介した他者とのかかわりは、どの様に変化していくと想定しているのか等を検証する。

イラン側の調査においては、行研究でも明らかになっているチャイを淹れ、他者と楽しむという日常生活の一部を人々はどの様に捉えているのか、そして、それらがコロナ禍により如何に変化したのか、という観点にたち分析を行う。

2. 研究方法

両国とも首都（東京、テヘラン）在住の 20 代から 60 代、男女各 10 名ずつ（計 100 名）にアンケート調査を行った。質問項目は以下である。

日本：

1　次の 4 大嗜好品の中であなたにとって「コミュニケーションツール」の一助として貢献していると思うのはどれですか（選択式）。

2　日本の社会では「酒を酌み交す」という行為はコミュニケーションの促進に貢献ていると思いますか（選択式）。

3　日本社会の中では「酒を酌み交す」という行為は、①新たな人間関係を築くことに貢献する、　②既に構築されている人間関係をより親密なものへと移行させることに貢献する。①、②のどちらに、より効果的に働くと思いますか（選択式）。

3　あなたが日常生活の中で、一番頻繁に「酒を酌み交す」相手をお答えください（選択択式）。

5　あなたが、頻繁に飲酒する場所をお答えください（選択式）。

6　日本社会における所謂ハレの日（冠婚葬祭、年中行事などの所謂特別な日）におき酒をふるまわれた、或いはふるまった経験がありますか（選択式）。
7　前の問いで日本社会におけるハレの日（冠婚葬祭、年中行事などの所謂特別な日）におき、酒がふるまわれる機会は、今後どの様に変化すると思いますか（選択式）。
8　コロナ禍以前と比べて、あなたが「飲み会」に参加する機会は変化しましたか。
＊酒に限らず、ソフトドリンクやノンアルコール飲料などを飲む集まりをふくみます。またオンラインでの飲み会も含みます（選択式）。
9　ポストコロナ禍社会におき「飲み会」の機会はどの様に変化すると思いますか。
＊酒に限らず、ソフトドリンクやノンアルコール飲料などを飲む集まりをふくみます。またオンラインでの飲み会も含みます（選択式）。
10　「酒を酌み交す」という行為から、コミュニケーションが促進され、良い結果（良い思い出）に繋がった経験、または予期せぬ悪い結果（悪い思い出）に繋がった経験などをお答えください（記述式）

イラン：
1　次の嗜好品の中で、あなたにとり「コミュニケーションツール」の一助として貢献していると思うのはどれですか（選択式）。
2　イラン社会で「他者と共にチャイを飲む」という行為はコミュニケーション促進に貢献していると思いますか（選択式）。
3　イラン社会で、「他者と共にチャイを飲む」という行為は①新たな人間関係を築ことに貢献する、②既に構築されている人間関係をより親密なものへと移行さることに貢献する。①、②どちらにより効果的に働くと思いますか（選択式）。
4　自宅にいずれかのチャイをいれる器具（ティーバッグを含む）はありますか（選択式）。
5　一人の時、或いは同居する家族だけのために、主として何を用いチャイをいれますか（選択式）。
6　来客（家庭、職場等）があった場合、何を用いチャイをいれますか（選択式）。
7　カフェで一番多く口にする飲料は何ですか（選択式）。
8　コロナ禍におき、「他者と共にチャイを飲む」という行為はどの様に変化しましたか（選択式）。
9　ポストコロナ禍におき、「他者と共にチャイを飲む」機会はどの様に変化すると思いますか（選択式）。
10　「他者と共にチャイを飲む」という行為から、コミュニケーションが促進され、良い結果（良い思い出）に繋がった出来事、或いは予期せぬ悪い結果（悪い思い出）に繋がった出来事などを記して下さい（記述式）。

3. 結論

必要に迫られた関係を維持するために「酒を酌み交わす」という日本独特の社会習慣は、減少している傾向にあり、寧ろ個人の意思で酒の場を設け、友人らと楽みたいという人々の現状が今回の研究で示唆された。

また、伝統的なハレの日などに設けられる宴会、個人で楽しむ酒の機会についても今後は減少するのではないかと、ポストコロナ禍における他者との付き合い方を危惧する意見が一定数見られることからも、コロナ禍を機に、今後は型にはまらない多様性をもった新たな酒の楽しみ方が浸透するのではないかと考えられる。

一方、イランにおけるチャイは社会的に広く浸透している飲料であると本研究は示している。それは嗜好という域を超え、社会生活に欠かせない文化的国民飲料と表現しても過言ではないだろう。更に「チャイを他者と楽しむ」という行為が、コロナ禍においても減少することはなかったという多数の回答から、イランの人々が職場、或いは友人である他人よりも家族、親族らと共にチャイを共に口にするという体で社会生活の一端を営んでいる実状が一般的であることが示唆され、イラン社会に根強く残る宗教的、伝統的家族文化の強固な定着が国民的飲料と大いに関係している背景が把握できた。

両国の共通点として「酒」、「チャイ」、それぞれの飲料が新たな人間関係を築く際、そして既存の人間関係の発展、両ケースに貢献すると半数以上の人々が考えている点が特定できたことを加筆しておく。

社会的構造の相違から、両国の嗜好飲料、その効用には相違がみられる。しかしながら、人間が生きていくために摂取しなければならない栄養素としての飲食とは一線を画した文化的役割を酒とチャイはそれぞれの社会で担っていると考察できる。